

むがす むがす

あるところに、肝のすわった和尚さんがいました。和尚さんは、鐘をたたきながら国じゅうを修行して歩いていました。

ある日のこと、にわか雨が滝のように降ってきたので、和尚さんは、一軒のお百姓の家の軒下（のきした）にかけこみました。そうやって雨宿りしていましたが、雨はいっこうにやみそうにありません。そのうち、日が暮れてきました。和尚さんは、その家の戸をたたいて、

「どうか、ひと晩、泊めてください」とたのみました。すると、おかみさんが出てきて、「今夜はお客があるから、気の毒だけれど、泊められません。ここをまっすぐ行くと、だれもない古寺があるから、そこでも入って泊まりなさい」といって、焼きおにぎりをくれました。

和尚さんは、ずぶぬれになりながら、そのお寺に行きました。そこは、くもの巢（ね）だらけの荒れ寺でした。

和尚さんは、縁の下にあつた割り木を炉辺に運んできて、のんのん燃やしました。ぬれた衣を乾かしているうちに、和尚さんは、体も温まって、眠ってしまいました。

何時間かたったころ、客殿のほうで、ガターンと大きな音がしました。和尚さんが、はつと目を覚ますと、ミスツ、ミスツという音が近づいてきました。そして、障子がすーっと開いて、子どもをだいた女が入ってきました。女は、和尚さんの前にべったり座ったかと思うと、

「どうか、ひと晩、この子をあずかってくれませんか。わけは聞かないください」といって、涙をぼろぼろ流しました。和尚さんは、かわいそうに思って、子どもをあずかってやりました。女は、お礼をいいながら、すーっと障子を閉めて行ってしまいました。

子どもは、少しもじつとしていないで、和尚さんの周りをぐるぐる回っていました。そのうち、和尚さんは、なんだか首がしめつけられるように苦しくなってきました。そこへ、天井から太いくもの糸がたれさがってきたかと思うと、子どもは、くもになって、糸の先にぶら下がって、するすると登っていきました。すると、和尚さんまで天井へぐんぐん引つ張られていきました。和尚さんは、苦しくて、力まかせに糸を引っ張りました。そのひょうしに、

糸が切れて、和尚さんは下のいろりの中へ転がり落ちました。そして、大やけどをしてしまいました。

つぎの朝、お百姓とおかみさんが、

「昨夜はそっけなく断ってしまったけれど、あの荒れ寺で、どうやって過ごしただろう」と、心配してやって来ました。すると、和尚さんが大やけどをして苦しんでいたので、ふたりはびっくりしました。

和尚さんは、ふたりに昨夜くもの化け物が出てきたことを話しました。そして、ふたりに手伝ってもらって、天井裏うらに上がってみました。すると、人の骨がいっぱい散らかっっていて、その上におそろしく大きなくもの親子がうずくまっていました。くもの親子は、和尚さんたちに気がついて飛びかかってきました。そこで、三人がかりで、やつこのことでも退治たいじしました。

それからのち、和尚さんは、そのお寺の住職じゆうしやくになつて、くもに殺された人たちを手厚くとむらったということです。

こんで えんつこ もんつこ さげだ

村上郁再話

資料『むがすむがすあつとごぬ』佐々木徳夫／未来社